岸田理生アバンギャルドフェスティバル
リオフェス２０２３
寺山修司没後４０年記念認定事業
【天井桟敷の人々】シリーズ１

「チャイナ・ドール　上海異人娼館」

原作・寺山修司　構成 脚本・岸田理生

「田園に死す」

作・寺山修司

構成上演台本①

構成 脚色 演出・吉野翼

会場には蚊の鳴くような、静かな音が流れている。
壁全面が黒で覆われており、後ろのシャッターの前には開閉式の幕が吊られている。
天井からは様々なオブジェクトが吊られ、統一感がない。
上海国旗、日本国旗、縄、木、葉、裸電灯、折り紙、風車・・・
床のリノリウムの上には破れた写真が散りばめられている。
一枚の畳。
壁には、絵画、額に入った顔写真、柱時計等が飾られている。
舞台上にはパネル式の戸板が四枚、
一枚目表には「春桃楼」と書かれ、裏には「黒地に模様」が絵書かれている。
二枚目表には「犬神大サーカス団」、脇には小さく、「空気女賛江、一寸法師賛江、蛇姫賛江」と書かれ、裏には「黒地に模様」が絵書かれている。
三枚目表には「家」と書かれ、裏には「黒地に模様」が絵書かれている。
四枚目表には「恐山」と書かれ、裏には「黒地に模様」が絵書かれている。

そこには、女たちが数人、雛人形のように存在している。
まるで飛田新地を描いた古い活動写真を切り抜いたかのよう。
彼女らは時折、人形のように身体を明滅させる。

「チャイナ・ドール　上海異人娼館」

原作　寺山修司

構成・脚本　岸田理生

◆登場人物

・黒蜥蜴　のぐち和美
・少女　小寺絢
・西瓜男　中村天誅
・折檻禿　ハララビハビコ
・白蘭　井口香
・青年将校　村上和彌
・口絹　村田詩織
・客　徳重樹
・咲耶　福田晴香
・雑貨商　佐野眞一
・尾花　内海詩野
・少年　尾上貴宏
・愛染　芹澤あい
・趙　シマダ　田島謙太
・鸚鵡（少年）　尾上貴宏
・男の声　演出家（吉野翼）
・連鎖の娘　福田晴香
・辻楽士の青年　那須寛史
・歌姫の少女　秋桜子

0　・プロローグ

そこは上海の街。
どこかで起きた火事を映して血色に焼けただれている。
街の空は墨色の雲に蓋をされたようになり、その下は赤色に染められたような空間を
男たちが歩き回っている。
軍服の青年将校がいる。
弁髪の苦力がいる。
水煙草をくわえた阿片吸飲者がいる。
船乗りがい、雑貨商がい、料理人がいる。
背後には娼館「春桃楼」の看板。
一九二〇年代の終り。
国際租界上海。
街の女たちは、まだ眠っている。
観客が入場し終わると、街は闇に包まれて行く。
ＳＥ・がやがやとした街の人々の雑踏の音。
後、
ＳＥ・鈴の音が聞こえ、静かに、溶暗。

1　・声

暗黒の中で、男の声（録音）が問いかける。
男の声　ここはどこ？
暗黒の中で、少女の声が答える。
少女の声　どこでもないわ、まだ。
また問いかける。
男の声　きみは、誰？
また答える。
少女の声　誰でもないわ、まだ。

男の声　まだ？
少女の声　ええ、これからなるの。
男の声　誰に？
少女の声　たとえば・・・
男の声　たとえば？
少女の声　そうね・・・
男の声　たとえば？
少女の声　そうね・・・、たとえば・・・

SE・つむじ風が吹き、少女の声を吹き消して行く。

と、銅鑼の音が鳴り響く。

2　・娼婦訓

平手打ちの明かりがつくと、「春桃楼」の看板の横には、
女主人の黒蜥蜴を中心に、
娼婦の白蘭、扣絹、咲耶、尾花、愛染、鞭を持った折檻禿（世話係）、
が立ち座り並び、
脇には、辻楽士の青年、歌姫の少女も鎮座している。
その前には、西瓜男に連れられた少女が一人、座っている。
活人画の一刻。
SE・不意に大時計の音、
ゆらりと動いた黒蜥蜴が少女に訊く。

・M1「いと小さきプロローグ」

黒蜥蜴　何故、娼婦に？
少女　試したいのです。
黒蜥蜴　何を？
少女　私の恋を。百人の男たちに抱かれても、いつもあの人を想っていられるかどうか、試したいのです。

娼婦たち、どっと笑いだす。

黒蜥蜴　試してみるがいいさ。だけど、その前に、おまえたち、この店のしきたりを説明しておやり。

いきなり西瓜男が声を上げ、折檻禿が鋭く鞭を鳴らす。
と、はじかれたように娼婦たちがのたうつ。

西瓜男　客の選り好みをした娼婦は・・・
折檻禿　その尻に百一回の鞭を受ける。

禿は打つ、白蘭、のたうつ。

西瓜男　客の要求を拒んだ娼婦は・・
折檻禿　百一日、食事抜きの罰を受ける。

禿は打つ、咲耶、のたうつ。

西瓜男　客の相手をしている時に、しのび笑いを洩らしたり、服従心を欠いたりした娼婦は・・・
折檻禿　体を洗ってはいけないという罰を受ける。

禿は打つ、扣絹、のたうつ。

西瓜男　神、仏を信じた娼婦は・・・
折檻禿　百一人のトラホーム患者と交わる罰を受ける。

禿は続けざまに打つ、尾花と愛染、のたうつ。

青年将校が入ってくると、

青年将校　賑やかだね。
黒蜥蜴　いらっしゃい。
青年将校　どうしたんだ。
黒蜥蜴　新入りが来たんですよ。
西瓜男　それも、とんでもないお嬢様でいらっしゃる。

西瓜男、少女を青年将校の前に押し出して、

西瓜男　（少女を真似）試したいのです。私の恋を。百人の男たちに抱かれても、いつもあの人を想っていられるかどうか、試したいのです。

娼婦たち、また、どっと笑う。

黒蜥蜴　と、いう訳で、今、この店のしきたりを教えていたんですよ。白蘭。

娼婦白蘭がすすみ出ると、

白蘭　はい。

黒蜥蜴　今夜の口開けの、験のいいお客様だ。大切にね。

白蘭　はい。

黒蜥蜴をはじめ、娼婦たち、西瓜男、折檻禿、白蘭と青年将校を残し消えていく。
空間を支配する音楽。
暗転。

3　・母子遊戯

闇の中で黒蜥蜴の声がする。

黒蜥蜴の声　いいかい、よぉく見るんだよ。今日からおまえは娼婦見習いだ。眼が飽きる程に見て、習うんだよ。

少女の声　はい。

溶明すると、白蘭が青年将校を鞭打っている。

白蘭　たしかにお前がやったんだね。

青年将校　そうです。母さん、何もかも、ぼくがやったんです。

白蘭　手紙を開封したのも、おまえ。（打つ）

青年将校　ぼくです、母さん。

白蘭　蜜蜂の箱を開けっぱなしにしたのも、おまえ。（打つ）

青年将校　ぼくです、母さん。

白蘭　私のシュミーズを盗んだのも、おまえ。（打つ）

青年将校　ぼくです、母さん。

白蘭　ほんとうに、悪い子だ。

続けざまに打ち、ふっとやめる。

白蘭　腕がくたびれてきたわ。

青年将校　休憩しよう。

椅子に座る。
白蘭、歩きまわって青年将校を見やり、やがてその膝にもたれかかる。

青年将校　子供の頃、僕は宝探しの遊びに夢中だった。いや、宝探しじゃない、宝隠しだ。
白蘭　宝隠し？
青年将校　そう。宝隠し。隠すのは、いつも僕で探すのは、母さんだった。ぼくは、手当たり次第、なんでも隠した。母さんの身のまわりのものは、ほとんど、一度はぼくに隠された。財布、書いたばかりの手紙、靴、ハンドバック、どんな小さなものでも隠した。そうして・・・
白蘭　そうして？
青年将校　そうしてぼくは香水を隠した。青い、ちっぽけな香水壜。そうして・・・
白蘭　そうして？
青年将校　そうしてぼくは、間違って香水を服にしみこませてしまって、それで、バレた。そうして・・・
白蘭　そうして？
青年将校　そうして母さんは、ぼくのポケットに隠してあった香水壜をみつけて、泣いた。それから言った。

白蘭、不意に母親になり、

白蘭　これは私の宝物なのよ。それをこんなにこぼしてしまって、もうないじゃないの、なんて子なの。

白蘭、いきなり青年将校の頬を平手打ちする。

白蘭　もう帰ってこないわ。母さんはね、おまえより、この香水が大事なの。それをこぼしてしまったんだから、もう帰ってこない。おまえが悪いのよ。
青年将校　母さんは、家を飛び出したっきり、戻ってこなかった。青い、ちっぽけな香水壜を母さんに贈った男の所に行ったっきり、帰ってこなかった。だから、
白蘭　だから？
青年将校　ぼくが最後の記憶に覚えているのは。あの痛みだけなんだ。母さんの手が僕の頬を打ったときのあの、痛み。

白蘭、再び鞭を手にすると、青年将校を打つ。

白蘭　おまえは色んなものを隠したわ、でも、私を隠すことは出来なかった。だから、今度は私が隠す番よ。私は私を隠す。探すのはおまえよ。
青年将校　母さん、母さん、母さん。

青年将校、喘ぎながら、のたうつ。

が、不意に顔つきが変わり、白蘭の手から鞭を奪いとると、白蘭を打つ。

青年将校　おい、おまえ、どこへ行ってたんだ？（打つ）

白蘭　友だちのところ。

青年将校　もう夜だ。（打つ）

白蘭　ごめんなさい。

青年将校　夜遊び火遊び鞭の罰だ。（打つ）

白蘭　もう、しません。

青年将校、打ちやめると、

青年将校　話して。

白蘭　いなかったのよ。最初っから、父さんがいなかった。だからね、私、空想したわ、父さんの身長、父さんの体重、父さんの癖、私、父さんに髭を生やした。そうして、思った。父さんが私を抱き上げる。

青年将校、白蘭を抱き上げる。

白蘭　父さんは、ただいま、と言って私に頬ずりする。

青年将校、頬ずりする。

白蘭　髭が痛い。じょりじょりした髭の感触。そうね。それが少しずつ少しずつ拡がって、私、作ったわ、お話を。

青年将校、白蘭をおろすと、鞭を手に、仁王立ちになる。

白蘭　（正座し）私が遅く帰ると、父さんが待っている。父さんが訊く。

青年将校　おい、おまえ、どこへ行ってたんだ？（打つ）

白蘭　友だちのところ。・・・友だちなんていなかったわ、一人も。

青年将校　もう夜だ。（打つ）

白蘭　ごめんなさい。・・・そうね、その言葉を覚えたのは大人になってからよ。

青年将校　夜遊び火遊び鞭の罰だ。（打つ）

白蘭　もうしません。・・・もうしませんってくりかえしながら、私、色んなものを盗んだわ。生きるために。

青年将校、白蘭を打つ。

白蘭　言葉なんていらないわ。無意味な言葉に窒息しながら生きるより、体の痛みでつながって死にたい。帰ることができるの、私、父さんのところに、いつだってね。空想の父さん、

私の父さん。

青年将校、鞭を投げ捨てると、白蘭を抱きすくめる。

白蘭　終わると寂しい。ちょっとだけひんやりした空気が背中にあって濡れねずみの仔猫みたいに身震いすること・・・寂しいっていう気持ちって、そういうことなのよ、多分。

白蘭は一筋の涙を零す。

溶暗。

4　・恋里死遊

闇の中で、男の声が言う。

男の声　きみは、私の患った最後の熱病だ。これは、私の、実験なのだ。

少女の声　あなたはこれから他人の手で私を愛撫するのよ・・・、あなたは百人の客になって、百倍、私を可愛がってくれるの。そうして、私にとって、あなたはいつも一人だけ・・・。

溶明すると、娼婦扣絹が荷物を持って現れ、「春桃楼」の看板に向かって深々と一礼し、

扣絹　お世話になりました。

去って行く。

しばらく無人の舞台。

と、扣絹が客と共に戻ってくる。

扣絹　大丈夫よ。まかせておきなさい。

客　俺、はじめてなんだよ。

扣絹　すぐに天国になるわよ。

客　よろしくお願いします。

扣絹　もう一度、言って、

客　えっ？

扣絹　よろしくお願いしますって、もう一度言って。

眼をつむる。

客　よろしくお願いします。

扣絹、眼を開け、

扣絹　やっぱり。
客　何が？
扣絹　あんた、赤座の出でしょう。
客　そうだけど・・・どうして？
扣絹　眼、つむって。
客　・・・
扣絹　いいから、つむって。

客、眼をつむる。

扣絹　よろしくお願いします。

客、眼を開け、

客　あんたもなんだ。同じ訛りだ。
扣絹　そうよ。同じ村。一月には、
客　ウサギを食って、
扣絹　ウサギの肝は甘味があって、うまくって、体があったまって、雪。
客　二月には鍛冶屋の音が、
扣絹　トーン、
客　テーン、
扣絹　カーンと響いて木枯し。
客　三月には、ひなまつり。
扣絹　四月には、青物採り。
客　白い雪の下から、黒い土。
扣絹　土の中から、萌黄色の芽。
客　それでようやく、まだ寒い春。
扣絹　五月はワラビ。
客　トタンの上で萱を焼いて、
扣絹　灰を作って、その灰を、
客　バケツに入れたワラビの上にまいて、
扣絹　熱湯を注いで一晩おいて、
客　次の朝には、
二人　ワラビのおひたし。
客　六月にはフキ。
扣絹　七月七夕。

客　八月花火。
扣絹　九月はトウモロコシ。朝も、
客　トウモロコシ。昼も、
扣絹　トウモロコシ。夜も、
客　トウモロコシ。おまけに、
二人　お八つも、トウモロコシ。
扣絹　十月には茸。
客　十一月は、もう冬で、
扣絹　十二月には雪の中。

二人、笑い合う。
扣絹、ふっと笑いをおさめ、唄い出す。

M2　・唄「親殺し」　（扣絹・生歌）

闇夜恐ろし　他人はこわい
親と月夜は　いつもよい

親のいない子は　浜辺の千鳥
日暮れ日暮れに　袖ぬらす

子守奉公に　出すよな親は
親じゃないぞぇ　子の敵

親のいない子は　入日をおがめ
親は入り日の　まんなかに

子守をさすよな　邪慳な親が
なぜに乞食を　させなんだ

客、じっと扣絹を見ている。

扣絹　どうして、そんな眼で見るの？
客　眼に訊いてください。
扣絹　言葉で答えなさいよ。
客　眼は喋れません。
扣絹　だから口で答えなさいよ。
客　口は見ていません。
扣絹　どうしたの、一体。

客　眼が離れなくなりました。
扣絹　離れるよう命令しなさいよ。
客　あんたがしてください。
扣絹　嫌よ。
客　だったらあきらめてください。
扣絹　どういうつもり？
客　わかりません。
扣絹　言いつけるわよ。
客　誰に？
扣絹　オマワリさん。
客　僕の眼は加害者じゃない。
扣絹　あたしは被害者よ。
客　そんなこと、誰も信じない。
扣絹　どうすればいいの？
客　一つだけ手があります。
扣絹　何よ。
客　あなたの眼が僕から離れなくなればいい。
扣絹　私の眼が、あんたから離れなくなって、
客　僕の眼があなたから離れなくなったら、
扣絹　どうなるの？
客　・・・
扣絹　あんたの眼が私から離れなくなって、
客　あなたの眼が僕から離れなくなったら、
扣絹　それから、どうなるの？
客　・・・
扣絹　どうするの？
客　・・・
扣絹　どうしたいの？
客　心中してください。
扣絹　いいわよ。

客、懐から薬包をとり出す。

客　生きて捕虜の恥ずかし目を受けるより、死んで命をまっとうしろと云われて、貰いました。入隊したその日に。
扣絹　いいわよ、兵隊さん。

客は傍らのコップの水に薬を溶かし、もう一つのコップにわける。
二人、コップを前に正座すると、

扣絹　よろしくお願いします。
客　よろしくお願いします。

二人、薬を飲むと倒れる。
と、戸板の後ろから少女が顔を出し、その後ろからが咲夜が顔を出すと、
少女を押さえつけて引っこませる。
少女、それを振りきって、また顔を出し、咲夜、またそれを押さえつける。
と、扣絹と客が起き上がる。

客　（晴々と）いやあ、今夜も気持ちよく死なせて貰った。
扣絹　この次も気持ちよく死なせてあげるわよ。私が生きてさえいたらね。

二人、立ち上がると去る。
少女、前に出てきて、不思議そうにあたりを見回す。
と、そこに、
辻楽士の青年、歌姫の少女、
娼婦たち、折檻禿が戸板の後ろから現れて、
少女をとりかこみ、「花いちもんめ」のように周りを回りながら。

M3　・数え唄「春夏秋冬わらべ歌」

折檻禿　なまめきの、春です。
白蘭　春麗ら、です。
咲耶　何も知らずに、売られてきて、
尾花　何も知らずに、見て習い、
愛染　春の陽ざしの、そのなかに、
折檻禿　淫らな匂いを嗅いでいる。
白蘭　私でありました。
咲耶　ここは、春です。
尾花　栗の花の匂いは濃く、
愛染　甘く満ちて消えない、
娼婦たち　春麗ら、です。
折檻禿　体の責めは、
白蘭　心を開け放つ、
尾花　ものなのでしょうか？
咲耶　姉さん方は、
愛染　いつも春でありました。
娼婦たち　春麗らでありました。
咲耶　あたしは、
折檻禿　生きてゆきたいと思います。

白蘭　春、
咲耶　夏、
尾花　秋、
愛染　冬、
娼婦たち　四つの季節をやりすごせば、一年は生きられるのですからそうして、また春なのですから春、麗らなのですから。

娼婦と楽士たち、少女と禿を残して去って行く。

5　・鳥よ鳥よ

少女と折檻禿がとり残され、少女はぼんやりとしている。
西瓜男を従えた黒蜥蜴が来ると、

黒蜥蜴　何か見たかい？
少女　出来事を。
黒蜥蜴　何か習ったのかい？
少女　まだ、わかりません。
黒蜥蜴　あの男の噂を聞いたよ。
少女　どんな？
黒蜥蜴　新しい女が出来たそうだ。

少女、笑む。

黒蜥蜴　いいのかい？眼から遠ざかる者は、心からも遠ざかる、と言うよ。

少女、笑む。

黒蜥蜴　ちっとも便りがないし。
少女　手紙は距離を感じさせるだけです。記憶のなかのあの人は、いつも私にぴったりと寄り添っている。
西瓜男　だが嫉妬なぞというものもある。
少女　あの人の新しい女のことですか？
西瓜男　ああ、そうだ。
少女　彼女がいてくれる方がいいんです。
西瓜男　何故？
少女　彼女は、ただ快楽のための肉体だから。

黒蜥蜴　ずいぶん、傲慢だこと。
少女　恋、です。私たちの、これは。そうして私たちが恐れているのは互いの想像力だけ。

黒蜥蜴と西瓜男、顔を見合わせて嘲笑する。

西瓜男　まあいいさ。信じる者は救われん、だ。だが、（折檻禿に）

禿、手にしていた鞭を一振りすると、

禿　神、仏を信じた娼婦は、百一人のトラホーム患者と交わる罰を受けます。
少女　信じています、信じていません。あの人を信じて、神と仏を信じていません。あの人は、男・・・私の、男。神でも仏でもありません。

娼婦愛染が入ってくる。

愛染　母さん・・・撮影所から、台本届いてません？
黒蜥蜴　何の台本？
愛染　今度、撮影に入る、新しいキネマの台本よ。
黒蜥蜴　そうだっけ？
愛染　母さん、私、まだ主役よ。きのう手紙が来て、別便で送る。って言ってた。
西瓜男　待ってりゃ、来るだろうさ、その内な。
愛染　そうね。

愛染、去っていく。

少女　本当に来るんですか？
黒蜥蜴　来るもんか。もう十年も同じことを言ってるんだ。（自分の頭を指して）ここに来てるんだよ。ここに。そうして、
少女　そうして？

黒蜥蜴、「春桃楼」の看板を見、

黒蜥蜴　そうしてここは、愛染の（頭を指して）ここと同じ、夢の続きの場所だ。

客の雑貨商と　娼婦咲耶が入ってくる。

黒蜥蜴　いらっしゃいませ。
雑貨商　この子が新入りかい？
黒蜥蜴　はい。
雑貨商　（少女に）おじさんは鳩の啼き真似がうまいんだよ。一緒に遊ぶかね？

西瓜男　勿論ですよ。
黒蜥蜴　どうぞ、ごゆっくり。

黒蜥蜴と西瓜男、折檻禿、出ていく。

雑貨商　（いきなり）バタバタバタ。

叫ぶと、大鳥の真似をする。

雑貨商　俺様は鳥だ。子供をつかまえて、喰っちまうぞ。

少女を追いかける。
少女、逃げる。

雑貨商　子供の肉は甘くて、うまいぞ。
少女　食べられるのは怖いです。
雑貨商　バタバタバタ。

雑貨商と少女、走りまわる。
それを見ながら、

咲耶　子供の頃、誰も私を相手にしてくれなかったので、あたしはよく嘘をついて、みんなの注意を集めた。・・・誰も見たことのない赤い鳥・・・、空から降ってきた星のかけら・・・、そうして、川に沈んで行ったグランド・ピアノ・・・。

雑貨商、少女をつかまえると、愛撫する。

雑貨商　ククク・・・、ククク、さあ、啼いてごらん。
少女　・・・。
雑貨商　おまえは出来事のなかに、入って行きたいんだよ。だけどおまえは、いつも自分だけの風景だ。・・・気持ちいいかね？
少女　・・・。
雑貨商　腹が空いているんだね？食べさせてあげよう。さあ、おまえも啼きなさい。
少女　・・・ククク・・・。
雑貨商　寒いんだね。あたためてあげよう。
少女　いつだったかしら？
雑貨商　ククク・・・、ククク・・・。
少女　大きな木の梢で、木の葉が注いでいた。その梢をじっと見上げていたのは、いつだったかしら？
雑貨商　ククク・・・、ククク・・・。

少女　そのとき私は、どこに立っていたのかしら？

不意に咲耶が、ハトの啼き真似で、

咲耶　ククク・・・、ククク・・・。

少女　ひらひらとそよぎながら、あの木の葉はあれは、みどりいろの蝶を装っていた。そうして、装っていることを私に悟られているとも知らず、いかにも本物らしく空に舞い上がろうとした。

咲耶　ククク・・・。

雑貨商　それから？

咲耶　でもあれは、ただの木の葉だった。

少女　ククク・・・。

雑貨商　それから？

少女　私が蝶の真似をする木の葉に見惚れていたのは、木の葉のほこりを感じたからよ。

咲耶　ククク・・・。

雑貨商　それから？

咲耶　風にひらひら揺れていたあの木の葉を犯すなんてこと、誰にも出来やしなかった。本当にあれは、みどりいろの蝶よりも、もっと本物の生き物だった。

少女　ククク・・・、ククク・・・。

雑貨商　もっと喋っておくれ。

咲耶　私をつかまえて頂戴。私の体中の細胞全部に潜り込んで頂戴。そうしたら、細胞が一つ残らず泡立って、私、溺れるわ。

雑貨商　おまえだね？

咲耶　ええ、ハトのおじさん。

少女　ククク・・・。

雑貨商　美しい娼婦のおまえだね？

少女　そうよ、私よ。

どこからか静かなピアノの音が聞こえる。
歌姫の少女が弾くピアノの調べ。

M4　・「沈み、静か」　作曲・秋桜子　（生演奏・即興）

雑貨商が少女を犯し、その髪が拡がっていく、
愛撫の形でシルエットとなり、咲耶の姿だけが残る。

咲耶　いつかきっと嘘が本当になる。川に静んだピアノが鳴りはじめる。私は、風景じゃない。仲間入り出来ず見ているだけの風じゃない。

溶暗と共にピアノの音も消えていく。

6　・革命の産むもの

暗闇の中で男の声が言う。

男の声　目を閉じちゃいけないよ。客の体が私でないことを目で確かめながら受け入れるんだ。

少女の声　それからは、二人分の快楽よ。あなたと私の。

男の声　私は見ているよ。

少女の声　あなたの意志で私が撲たれ、凌される。今、私は、あなたの痛み。

溶明すると、娼婦尾花が客の少年の足を摩っている。

少年　イギリスの砲艦が写照燈で町中を照らしつづけている。見張っているつもりだろうが、そうはいかない。租界の暗闇じゃ着々と準備がすすんでいるんだ。・・・聞いてのかい？

尾花　思い出していたわ。

少年　・・・何を？

尾花　泣声。

少年　何の？

尾花　赤ん坊・・・。赤児の産声。赤ちゃんがね、生まれてくるでしょう。そのときに泣くでしょう。あれはね、怖いからなのよ、辛いからなのよ。生あったかい水の袋のなかで、母親と、ほとんど二人で一人だったのに、外に出ていかなくちゃいけない。嫌だよぅ、と言っているの。

少年　俺は、革命の話をしていたんだ

尾花　話して。

少年　革命は賭博だ。俺たちは、肉にむらがる蝿のように資金を集める。苦力の労働組合は香港のストライキ援助のために、全員五セントずつカンパすることに決めた。だけど、それじゃ、まるで足りない。

尾花　英国人追い出しのための資金をフランス人のカジノ支配人に出せと迫ったのでしょう。きのうお客さんだったわ。そのフランス人。それでね、無茶苦茶だと笑っていた。

少年　広東軍はソヴィエトから戦争物資を送られている。もう、人種の問題なんかじゃないんだ。

尾花　だったら、何のため？

少年　中国の自由。

尾花　支配されている方が、しあわせ、ってこともある。

少年　・・・帰る・・・。

尾花　短気は、およしなさい。

尾花、少年を抱きよせる。

尾花　あんたは、まだ寂しくないのね。その程度には子供なのね。ねえ、知ってる？大人になるってことはね、寂しくない時期を通りすぎて、もう一回寂しくなって、誰かを探す、ってことなのよ。

少年　俺はもう、革命に恋してる。

尾花　革命は抱いてくれないわ。

少年　抱いてくれるさ。硝煙の匂いを嗅ぐと、俺は勃起する。人を殺せば射精する。

尾花　でも、生まれない。

少年　生まれるさ。新しい中国。

尾花　体がないわ・・・。私、覚えてる。生き物の体。乳の匂いの体。そうして、それを捨てたわ、私。二度、捨てた。

少年　二度？

尾花　一度目は産んで、この世に捨てた。二度目は置き去りにして、家ごと捨てた。自分が自由になるために。今になって、ね、きこえるの。あの子の声がきこえる。季節は春、なのに、寒風が体を吹き抜けていく。季節は夏、なのに体が真底冷えて、秋になれば人肌が恋しい。冬になれば体が欲しい。

不意に尾花が激しく咳き込み、顔を背ける。

少年　どうしたんだ？

尾花、顔をあげる。
口が血まみれだ。

少年　血だ・・・。

尾花　そう、私の命。

尾花、懐中からズルズルと紐をたぐり出して財布を少年に渡す。

尾花　母さんが、おまえのために貯めた金だよ。大事に使うんだ。たまにはおいしいものを食べて栄養をつけるんだよ。それからね、好きな子ができたら髪飾りのひとつも買っておやり。

少年　・・・。

尾花　さぁ、もう、私は行くからね。母さん、さよならと言って頂戴。

少年　・・・。

尾花　母さん、さよなら、って。

少年　・・・。

尾花　きこえないよ。

少年　母さん・・・

尾花　それから？

少年　さよなら・・・。

尾花　もう一度。
少年　母さん、さよなら。
尾花　もう一度。
少年　母さん、さよなら。
尾花　はい、さよなら。
少年　母さん、さよなら、母さん、さよなら・・・。

くりかえしながら、既に生命の絶えた尾花に口づけをする。
肩が震え、忍び声が洩れる。その声が、徐々に変わって笑い声となり、尾花の血にまみれた顔を上げると、少年、哄笑して死体となった尾花を放り出し、

少年　ようやく死んだ。金を残して死んだ。雨で水かさを増した川が、濁流になって渦巻いている。俺が生まれた文なし横丁の、すべての貧しさ、全ての犯罪、すべての欲望を一口で呑み込むように流れて行く。革命だって？革命資金？冗談じゃない。これは俺の遊興費だよ。俺が遊ぶための金さ。俺は、死んだ娼婦が残した金で、生きてる娼婦を買うのさ。誰かいないか？酒だ！（笑う）

叫ぶと、溶暗。

6.5　・被虐の園

薄闇。
戸板に挟まれ尾花は消え、笑う少年の背後には折檻禿が立っている。
禿は静かにその口を動かす。

折檻禿　娼婦の遺言を裏切った客は、その尻に百一回の鞭の罰を受ける。
娼婦の夢を弄んだ客は、百一日、奴隷の犬になる罰を受ける。
文なしで娼婦を買った客は、百一日、娼婦の血を浴びる罰を受ける。
娼婦に神と仏を教えた客は、百一回、肺病やみの娼婦と交わる罰を受ける。

暗転。
闇の中、禿の声が響く。

折檻禿　さあ、お始めください。偽神様！

なだれ込む音楽。
戸板の影から浮かび上がる、黒蜥蜴、白蘭、扣絹、咲耶、愛染、少女。

辻音楽師の青年、歌姫の少女。
前には少年。
周りには目隠しをされた客たち（青年将校、客、趙（ヤマダ）、雑貨商）
まるで一つの生物のように肉塊となっている。
青年将校の後ろには白蘭、
客の後ろには扣絹、
雑貨商の後ろには、咲耶、
趙の後ろには、愛染、
少年の後ろには黒蜥蜴、
それぞれが鞭打ちの舞を踊る。

少女だけがその舞を見やるだけ。
折檻禿は客たちに容赦なく鞭を振るう。

M5・「偽神の虐」

黒蜥蜴「九天玄女が鞭を打つ！」
白蘭　「ああ！」（客たちはのたうつ）
白蘭「驩兜様が鞭を打つ！」
扣絹「ああ！」（客たちはのたうつ）
扣絹「鬱塁様が鞭を打つ！」
咲耶「ああ！」（客たちはのたうつ）
咲耶「東皇太一が鞭を打つ！」
愛染「ああ！」（客たちはのたうつ）
愛染「祝融様が鞭を打つ！」
折檻禿「ああ！」（客たちはのたうつ）
折檻禿「三苗様が鞭を打つ！」
娼婦たち「ああ！」（客たちはのたうつ）
娼婦たち「天之四霊が鞭を打つ！」
少女「・・・。」

折檻禿　さあ、あなたも。遠慮はいりません。これは偽モノの神、仏、の淫戯ですよ。
黒蜥蜴　白日、山に依って尽き、黄河、海に入って流れる。千里の目を窮めんと欲すれば、さらに上る一層の楼。

その姿を闇が塗り込めて行く。
暗転。

7　・愛欲の果て

闇の中で黒蜥蜴の声が、

黒蜥蜴の声　覚えておくんだよ。幸福は、わけることはできても苦痛は駄目。おまえ一人のものさ。

少女　私とあの人のものです。

溶明すると、娼婦の愛染が客の無頼漢・趙を相手に、「ドラマ」を演じ、西瓜男がカメラで、それを「撮影」している。

愛染　聞こえるわ。あのワルツが・・・、あの晩の胸のわくわくするような甘い曲が・・・、川の中から聞こえる。

趙　はい、奥様。

言うなり抱きつこうとするが、愛染はまるで、それが段取りのミスででもあるかのように、軽くいなす。

愛染　駄目！そこであなたは拳銃を見構えるんでしょ？こうやって。（銃をとり出し）

趙　何でもいいから早くやらせてくれ。倅がもう爆発しそうなんだ。

愛染　あんたは拳銃を構え、そして撃つ！わたしは倒れながら言う・・・、息をひきとる前に、お願いがあるんですけれど・・・。

趙　いつまでやってるんだ、こんなこと。早くやらせねえと、帰っちまうぞ。

愛染　オーケストラに頼んでいただきたいの・・・、あのときの曲・・・、あの淋しいワルツを。

趙、いきなり愛染の頬を叩き、

趙　いい加減にしろっ！俺はエキストラをやりに来たんじゃねぇんだ。

愛染　ちょっと助監督。この役者、おかしいわよ。

西瓜男、慌てて趙に、

西瓜男　まあまあ、お客さん。

趙　もと女優だとか、安くやらせるとか言うから来てみりゃ、何のことはねぇ、ドブスの気違いじゃねぇか・・・。

愛染　連れ出して頂戴。耳が汚れるわ。

趙　川の中からピアノが聞こえるだと？おまえ、つんぼか！小莫迦にしやがって、何が淋しいワルツだ！やらせねえなら、俺は帰る。

西瓜男　まあまあ、これでもサービスは極上ですから。この場面さえ演じていただれば、あとは天国極楽。

趙　冗談じゃねえ。俺は他人の人生を演じる程、ヒマじゃねぇんだ。

出て行き、西瓜男は慌ててあとを追う。そして何やらひそひそごそごそとしている。

愛染　川の中のピアノは、わたしたちのメモワール。あなたの言葉を思い出すわ。『ぼくは一生、あなたを愛します。命の限り・・・命の限り・・・』

西瓜男が船医風の男（ヤマダ）　※実は趙と同じ人物、を連れて戻ってくる。

愛染　・・・帰ってきてくれたのね、シマダさん。

ヤマダ　・・・俺はヤマダだ。シマダじゃない。

愛染　わかっているわ、シマダさん。もう、忘れたいのね、あの頃を、キネマ華やかなりし時代を。

ヤマダ　感違いしないでくれ。俺は、ヤマダで、船医だ。航海から帰って来たばかりで、あんたの顔を見るのもはじめてだ。

愛染　それは卑怯よ、シマダさん。私がこんなふうになってしまったのは、あなたのせいなんだから。

愛染、思い出したように懐から、長年、大切そうに持っていた、黄ばんでボロボロのブロマイドを一枚とり出し、なつかしそうに眺める。

愛染　ホラ、これよ・・・、あなたとわたしが『愛欲の海峡』で、空前のヒットを飛ばしたときのブロマイド。

ヤマダに渡す。

ヤマダ　男と女がいる・・・。

愛染　あんたとわたしよ。

ヤマダ　まるっきり別人だ。

愛染、また懐から、これもボロボロの新聞記事をとり出し、

愛染　それから、この切り抜き。わたしたち二人の演技をほめた、新聞の批評。

渡す。

ヤマダ、受け取って、

ヤマダ　『五歳の幼児、連絡船内で誘拐される・・・』何だこりゃ。活動写真の記事じゃない

じゃないか。
愛染　そんなに隠したいの？わたしたち二人の過去を・・・。

発作が起きたように震え出す。

西瓜男　（ヤマダに）たまに発作が出るんです。すいませんが調子を合わせてやって下さい。
おさまりゃ、サービスがいい女ですから。
ヤマダ　しかし。
西瓜男　それに、大部屋の脇役専門とは言え、女優だったことは本当なんです。

ヤマダ、帰ろうとするが、愛染に、

愛染　シマダさん！

呼びとめられて、調子を合わせる。

ヤマダ　ち。あー、はいはい。・・・思い出したよ、シマダってのは、俺の芸名だったんだ。

西瓜男、それっ、とばかりにカチンコを構える。

西瓜男　ヨーイ、スタート！

カチンコを叩く。

愛染　シーッ！
ヤマダ　（どぎまぎと）わかった、わかった、もうはじまったんだね。
愛染　「踊りはお好き？」
ヤマダ（出まかせで）「ええ、勿論」
愛染　「お歳は？」
ヤマダ　「四十二です」
愛染　「二十七・・・二十七でしょう？あの祭りの夜・・・、二人で、そっと踊りの輪から抜け出して、そう、川のほとりで・・・」

照明が変化し、音楽が入り、まるで仮面舞踏会のような様相になる。

M6　・「血転」

西瓜男、カチンコを構え、

西瓜男　シーン38カット2、ヨーイ、スタート！

鳴らす。

愛染　「わたしたち淋しいワルツを聞いたわ」
ヤマダ　「船はもう出てしまったよ」
愛染　「このまま飲み明かしましょう」
ヤマダ　「だが間もなく刑事がやってくる」
愛染　「構わないわ」

愛染、ふらりと前に出ると、

愛染　一向に構わない。新興キネマ『愛欲の海峡』あの主役を演るのは、私だった。だけど、プロデューサーは、どこかの小娘をヒロインにすると発表した。貧乏貴族のお姫さま。家柄と顔がいいだけの素人が主役ですって？冗談じゃない。私が許せなかったのはね、その娘が映画を好きじゃなかったってことよ。娼婦になるより、女優になる方が、まだ世間体がいいと思ってたのよ。あの餓鬼。映画はそんなもんじゃない。百人の千人の、大部屋女優の夢の、お墓。だから私、あの娘を殺したの、お墓に埋めるためにね。
ヤマダ　「愛染、逃げよう。今ならまだ何とかなる」

愛染、傍らに投げ出してあった拳銃をとり出して構える。

愛染　「むだよ。世界で一番遠い場所は・・・ここなんだから」
ヤマダ　「まさか・・・君は・・・」

愛染、ゆっくりと笑う。
暗転。
そして、闇の中で
SE・銃声が一発。
SE・つづいてもう一発。
その音が消えると、少女の悲鳴。

黒蜥蜴の声　とうとう、映画が死んだわ。

SE・雨の音が響く。かすかにピアノの音・・・

8　・戦火と娼家と…

黒蜥蜴と西瓜男、下男に成り果てた褌一丁の鸚鵡（少年）が現れる。
音楽が聞こえる。

M7　・「六道賛歌・色彩」

黒蜥蜴　はじめるよ。

手にしていた骨を投げる。
ノロノロと四つん這いで走って、骨を咥え、戻ってくる鸚鵡。

黒蜥蜴　なんて下手なの。尻尾を振るだけじゃ、駄目。字が読めないだけじゃ、犬とは言えないのよ。もっとしっかり、犬におなり。

鸚鵡、唸る。

黒蜥蜴　西瓜、おまえ、お手本を見せておやり。（と骨を投げ）ハイッ！

西瓜男、突然、低い唸り声をあげたかと思うと、犬に変身し、黒蜥蜴の投げた骨めがけて飛びかかり、咥えて戻ってくると、クンクンと甘い声を出し、黒蜥蜴の足に顔をこすりつける。

黒蜥蜴　（鸚鵡に）見てたでしょ、どうやったら、いい犬になれるか、（と、鸚鵡の尻を力一杯蹴る。もんどりうって喜悦の声をあげながら、ひっくりかえる鸚鵡。黒蜥蜴の足を舐めようと這ってくる。と、すかさず）おあずけ！

鸚鵡、悲しげに黒蜥蜴を見上げる。

黒蜥蜴　お手！

鸚鵡、素直に手をさし出す。

黒蜥蜴　チンチン！

鸚鵡、チンチンの格好をして立ちあがりかけ、よろける。
黒蜥蜴、すかさず一鞭くれて嘲笑し、

黒蜥蜴　まったく、駄犬の調教も楽じゃないわ。もう一度、やってごらん。

骨を投げる。
鸚鵡、四つん這いで追いかけ、骨を咥えて戻ってくる。

西瓜男　いつまで続くかね？
黒蜥蜴　やめて頂戴。まだ早いわよ、覚めるのは。
西瓜男　思うんだよ。
黒蜥蜴　思っちゃ駄目。
西瓜男　考えるんだよ。
黒蜥蜴　考えちゃ駄目。心とか頭とか、そんなもんは閉じるのよ。ついでに金庫もね。
西瓜男　だけどここは、段々剣呑な街になってきている。見えるんだよ。
黒蜥蜴　何が？
西瓜男　砂塵が巻き上がっている。馬に乗ったパルチザンが走って行く。真紅の旗が立ち上がる。歴史は、運ぶ男たちによって、流れる雲の赴きを変える、って奴だ。
黒蜥蜴　珍しくもない。
西瓜男　まもなくここも、
黒蜥蜴　まもなくここも？
西瓜男　戦場になる。
黒蜥蜴　怖いの？
西瓜男　そりゃあ・・・、
黒蜥蜴　怖いの？
西瓜男　怖い。
黒蜥蜴　弱虫。
西瓜男　ああ。
黒蜥蜴　逃げるんなら一人で逃げて。
西瓜男　・・・おまえ・・・
黒蜥蜴　何？
西瓜男　皺がふえたな。
黒蜥蜴　あんたはお腹がたるんだわ。

二人、黙る。
しばらくして、

黒蜥蜴　止めやしなくてよ。
西瓜男　決めちゃいないんだ。
黒蜥蜴　私はここにいる。あんたの代わりは、いくらもいるもの。

黒蜥蜴、鸚鵡の頭を撫でる。

西瓜男　そいつは、まだ半人前の犬だ。

黒蜥蜴　それだけ、調教のしがいがあるってもんよ。

西瓜男、いきなり鸚鵡を蹴り飛ばす。
と、鸚鵡は歯を剝き出しにして唸り、西瓜男の足にガブリと噛みつく。

西瓜男　やりやがったな。

四つん這いの「犬」になると、鸚鵡に飛びかかる。
犬の喧嘩がはじまる。
黒蜥蜴は、笑ってそれを見ている。

黒蜥蜴　私は犬が好きよ。自分のために名付けた犬、従順な犬、強い犬、やさしい犬。

西瓜男、鸚鵡を追って去る。
静かに音楽が聞こえる。

M8　・「糸引き」

黒蜥蜴　ここは、さかさまの世界。戦場で死の恐怖を味わった男たちは、それを癒そうとしてここへ来る。苦痛が滴る快楽の果実。男たちは食べる。食べさせる。そうしてつながる。

西瓜男が現れると、黒蜥蜴に鞭打つ。

黒蜥蜴　打って頂戴、静かな肩と疲れた微笑のあんた。そうすれば、夜の闇に、満開のヒナゲシが咲く。体の底が火事になる。もう何も怖くない。

西瓜男　はるかはるか遠くに火の手が見える。時代の火事が引きよせられてくる。何かが両眼に突き刺さって、眼の中に血がいっぱいの夢を見る夜、体の底で俺は痛みを一人占めする。

黒蜥蜴　ここでは時間は忘れ物。ここにいれば、死んだふりをしていられる。藁くさい湯気が立ちのぼって、娼婦をくるみ客をくるんで、刻が経って行く。私はここにいるわ、今日も、明日も、あさっても。

打たれる黒蜥蜴の背後の戸板から、白蘭、咲耶、扣絹、尾花、愛染が顔を出す。
娼婦たちは、既に死んでいる。
顔には白頭巾を被っている。

黒蜥蜴　時代の砂漠に蜥蜴がいる。

西瓜男　消えるように飛ぶように、素早く動いて、ふと止まる。

黒蜥蜴　尾がしなって背中があがる。砂の色の体の尾の裏だけが光る。

西瓜男　眼の端を、閃光になって走る蜥蜴。

黒蜥蜴　私は蜥蜴よ。時代の中を走る蜥蜴。

暗転。

闇の中、
フラッシュ一閃、
SE・一発の銃声がする。
倒れる黒蜥蜴の音。

少女の声　お母さん！

走り出てくる少女の音。
黒蜥蜴を抱え起こす音。

黒蜥蜴の声　いいこと？情欲なんてくだらない。でも、それに匹敵するものは、何ひとつ見つからないのよ。例え、革命のさなかでもね。

絶息する。
黒蜥蜴を抱えた少女の傍らに明かりが落ち、そこには西瓜男が佇む。

西瓜男　一九二五年、秋、上海。反植民地政策の烽火が上がり、流れ玉に当たって、娼家の女主人が死んだ。よくある話さ。

暗転。

9　エピローグ　・邂逅

暗黒の中で男の声が、

男の声　おまえはもう解放された。どこへでもいけるんだ。だけども、もしおまえが望むんなら、いつまでもここにいていいんだよ。

静かに音楽が消えていく。

平手打ちの明かりがつくと、そこは娼家「春桃楼」
看板の横には、
黒い衣裳を纏った女主人を中心に、
娼婦の白蘭、扣絹、尾花、愛染、鞭を持った折檻禿（世話係）、

が立ち座り並び、
脇には、辻楽士の青年、歌姫の少女も鎮座している。
その前には、西瓜男に連れられた娘（連鎖の娘）が一人、座っている。
活人画の一刻。
不意に大時計の音、
ゆらりと振り向いた女主人はかつて少女だった女。
娘に訊く。

・M9「いと小さきプロローグ」

少女　何故、娼婦に？
娘　試したいのです。
少女　何を？
娘　私の恋を。百人の男たちに抱かれても、いつもあの人を想っていられるかどうか、試したいのです。

娼婦たち、どっと笑いだす。

少女　試してみるがいいさ。百人の男たちに抱かれて一人の男を夢み、そうして、一人の男に抱かれて、百人の男を夢みることをね。それが、そう、娼婦・・・。

そして、娼婦訓がはじまり、ゆっくりと闇がそれを閉じこめて行く。

西瓜男　客の選り好みをした娼婦は・・・
折檻禿　その尻に百一回の鞭を受ける。

禿は打つ、白蘭、のたうつ。

西瓜男　客の要求を拒んだ娼婦は・・
折檻禿　百一日、食事抜きの罰を受ける。

禿は打つ、扣絹、のたうつ。

西瓜男　客の相手をしている時に、しのび笑いを洩らしたり、服従心を欠いたりした娼婦は・・・・・・

断章

「田園に死す」

作・寺山修司

◆登場人物

・中年の私　寺門祐介
・少年の私　多賀名啓太
・母　篠原志奈
・嵐 牛 股引　小城祐介
・化鳥　手塚日菜子
・草衣　日原奈緒花
・魔性の女　森澤碧音
・空気女（角巻）　キンカナ
・蛇遣いの女（角巻）　萩原雪乃
・一寸法師（角巻）　中島猛
・怪力男（角巻）　Na0K1
・せむし娘（角巻）　関口奈々
・鳥打帽（角巻）　七虹
・踊り子（角巻）　よしだみらい
・舞台監督　舞台監督
・制作スタッフ　神崎ゆい
・男の声 演出家　吉野翼
・辻楽士の青年　那須寛史
・歌姫の少女　秋桜子
・セーラー服の少女　関口奈々
・ボロを着た男　中島猛
・故郷田園風景の人々　稽古にて随時配役

・1　暗黒胎動

闇。

暗黒の中、男の声（録音）で和歌が音読される。

男の声「大工町米町寺町仏町老婆買ふ町あらずやつばめよ　新しき仏壇買ひに行きしまま行方不明のおとうとと鳥」

SE・からすの激しく群れ鳴く声と共に、
闇の中に平手打ちの光が差す。
一人の少年（少年の私）が不在無さ気にとぼとぼと入ってくる。
やがて薄闇となり、少年は辺りを見回し、目を手で覆い、闇に問いかける。

少年「もういいかい？」

少女の声「まあだだよ。」（化鳥）

少年「もういいかい？」

少女の声「まあだだよ。」（草衣）

少年「もういいかい？」

少女の声「もういいよ。」（魔性）

なだれ込む音楽と光。（イントロ）

男の声「ほどかれて少女の髪にむすばれし葬儀の花の花ことばかな」

戸板の後ろから現れる、化鳥、嵐（牛）、草衣、魔性の女。

やがて音楽は唄となる。

M10　・死児たちの唱「こどもぼさつ」

さいのかわらにあつまりし　みづこ　まびきこ　めくらのこ
てあしはいわにすりただれ　なきなきいしをはこぶなり
ゆびよりいずる　ちのしづく　みうちをあけに　そめなして

ちうえこひし　ははこひし　よんでくるしくさけぶなり
ああ　そはぢごく　こどもぢごくの　ああ

次々と現れる黒づくめの角巻たち。

・「ダンス・群舞暗黒葬列舞踏」

少年はその角巻たちに追い詰められ、身体がのたうつ。

SE・再びカラスの激しい鳴き声。
合唱の終わりと共に、のたうつ少年を残し、
暗転。

男の声「亡き母の真赤な櫛を埋めにゆく恐山には風吹くばかり」

2・古時計の刻

SE・鳴り続ける時計の音。
少年の家。
柱時計が鳴りっ放しになっており、時計修理を頼まれた男（股引）が時計を眺めている後ろ姿が見える、その傍ら、家の母親が呆然と佇む。

母「もう三日も鳴りつづけなんですよ」
男「・・・。」
母「放っておくと、音が全部出てしまって、なくなってしまうんじゃないでしょうか？」

男が手で、下から小突いてみる。
しかし、依然として鳴りつづけている。

母「何とかしてくださいよ。うちには男手がないんだから（しがみつく）」
股引「・・・。（時計を外そうとする）」
母「だめだ、それは！柱時計をはずしちゃだめですよ。バチがあたりますよ」
男「・・・。」
母「（急にしょぼんとして）直せませんかぁ？」

闇。

・3　覗き鬼

隣の家、対照的に近代的。
ポータブル蓄音機から流れているような音質の曲が鳴っている。
M11・「ピアノ曲・すれ違い」　作曲・秋桜子
美しい人妻（化鳥）が、日本舞踊のような舞を踊っている。
・「ダンス・ソロ　揺り篭」
戸板の裏から覗き込み、近づく少年。人妻がちらりと少年を見ると、
少年「あッ！　どうもすみません」
少年、よろけながら、気まずそうに逃げてゆく。
闇。

・4　村孕み

M12・「夕暮れ」
SE・鶏の鳴き声。
村の中。
集まった角巻きたち。
皆一様にトラホーム用の眼帯をかけ、黒づくめ、顔を寄せあっている。
白色の、面をつけたような顔、顔。
角巻たちはまるで人形のように身体と首を上下左右に揺らしながら、
ひそひそと声を発している。（録音）
その真中には、縄を手にして、悶えている草衣。
また戸板の影から覗いている少年。

・「ムーブ・野次馬」
角巻「首吉の分家のモヨの娘だろ」

角巻「儀助の本家の作蔵の娘だ」
角巻「いやいや昇吉の脇本家の姪らしい」
角巻「忠八の新家の出戻りにも似ている」
角巻「儀助の分家のハナの連れ子か？」
角巻「新三郎の娘婿の妹かもしれない」
角巻「正一の本家の後妻の末っ子にも似ているが……」
角巻「とにかく、孕んでいる」
角巻「父なし児を産むらしいよ」
角巻たち「父なし児を産むらしいよ」

少年、途中で角巻たちをかきわけて中を覗く。
草衣は縄につかまり、苦しみもだえている。
少年、驚きの眼を瞠って、その草衣を見ている。
髪がほつれ、半病人のように喘ぐ草衣、腹だけは異常にふくらんでいる。
少年の驚きの顔。

少年が逃げ出すと同時に闇。

・5　鬼子母信

SE・柱時計が鳴る。
少年は鼻歌を歌いながら、足の爪を切っている。
母親は、戸板に行きを吐きかけて磨いている。

少年「(何げなく) 母ちゃん」
母「(ふりむく) ン？」
少年「こないだ来た、隣の嫁さん、きれいな人だね」
母「(気のない返事) そうかい？」
少年「昨日、縁側で見たけど、おれの好みだな」
少年「母ちゃん」
母「(気のない返事) なに？」
少年「おれ、カワカムリの手術をしようかと思うんだ」
母「(ギクッとして) 何の手術だって？」
少年「(ケロッとして) カワカムリ」
母「(きわめて深刻に) だれにきいたの、そんなこと！」
少年「だれにもきかないよ。母ちゃんの読んでた『家の光』の附録に載っていたんだ」
母「(ギョッとして) バカなもの、読むんじゃないよ。(ドギマギして) おまえには、ちゃんと「少

年倶楽部」をとってやってるじゃないか！」
少年「（好奇心にみちたふうに）あれ、はやく手術しないと、発育をさまたげるんだって。それに不潔だ、って書いてあったよ」
母「（声だけ）おまえが不良になると、母ちゃんが世間の笑い物になるんだよ」

母親は手をついて少年に詰め寄るように話しかけているが、少年はそれを無視して、

少年「（ひとり言のように）おれ、いつ頃から毛が生えてくるのかな。隆平は、もう生えたって言ってたのに」
母「（きびしく）新ちゃん！」
少年「（不満そうに）はい」
母「（緊張している）あんまり親をバカにすると、母ちゃん、本気で怒るからね」
少年「……」
母「余計なことに頭使わないで、勉強のことだけ考えていなさい。おまえは、まだ子供なんだから！」

少年、足に下駄を突っかけてふいに出ていこうとする。
母親、それを追って、

母「新ちゃん！」
少年「……」
母「こんな夜中にどこさ行くの？」
少年「恐山へ行ってくる！」
母「何しに？」
少年「ちょっと、死んだ父ちゃんに会いたくなったんだよ！」

少年、夜の闇へ去る。
残された母親、急に気が抜けたようになる。

母「叱られると、すぐ父ちゃんに告げ口しにゆくんだから。いつから、あんな子になったのかしら。だけど、父ちゃんは、巫女（イタコ）になんか、降りて来ないんだから」

畳の上にペタンと膝を折り、数珠を出して、二言、

母「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」

と唱え、畳に向かって、

母「父ちゃん、父ちゃん。あたしです。セツですよ」

と、前の畳一枚を力まかせにめくろうとすると……。
急激な闇。
SE・からすの鳴く声の上に、男の声、
男の声「針箱に針老ゆるなりもはやわれとわが母との仲を縫い閉ぢもせず たった一つの嫁入り道具の仏壇を義眼のうつるまで磨くなり」

・6　恐山の魔性

戸板には恐山の文字。
ゆっくりと合唱「地獄篇」、広がってゆく。

M13・「地獄篇」
ああ、あ、（ハミング）…… ああ、あ、ああ、あ、
日は暮れて鐘が鳴る 死んだ我が子の赤い櫛

恐山。
真っ赤な世界。
若い女（魔性の女）が花を一輪手に身をひるがえし踊る。

・「ダンス・ソロ　花地獄」

飛ぶように踊る魔性の女。
少年、その背後で正面に向かい、大声で叫ぶ。

少年「昭和十八年の仏を降ろしてください！」
少年「父ちゃん、元気ですか？」
少年「今日は土産はないよ、ただ、話をしにきた」
少年「何か、家のことで知りたいことでもあったら、話すけど！」
少年「父ちゃん！・・・おれ、春になったら、母ちゃんを捨てて家出しようと思ってるんだ」
魔性が不敵な笑みを浮かべ、
男の声「濁流に捨て来し燃ゆる曼珠沙華 あかきを何の生贄とせむ」
闇。

・7　犬神大サーカス

高らかなジンタのひびき。

M14・「見世物星」

謎が笛吹く　影絵が踊る
　死んだ子供のサーカスだ
　とんぼがえりで地球がまわり
　あとはまっくら闇ばかり
赤い一番星　見いつけた

色エンピツに　またがって
　ゆくぞ地獄の天文館
　天幕はずせば夜の公園
　ぼくのお墓が一、二の三
赤い一番星　見いつけた

ゆううべ見た夢　あの人さらい
　電信柱の赤マント
　少年倶楽部の附録になって
　死んだ母さま　とんできた
赤い一番星　見いつけた

サーカスが村の空き地にやってきたのだ。
戸板には、犬神大サーカス団の文字。
脇には小さく、空気女賛江、一寸法師賛江、蛇姫賛江、などと書いてある。
空気女、一寸法師、怪力男、蛇遣いの女、せむし娘、鳥打帽、踊り子が、
見世物の練習で踊っている。
後ろでは、辻楽士の青年と、歌姫の少女が歌い、演奏をしている。

・「ダンス・群舞　見世物星」

ダンスが終わると、皆、騒ぎながら、方々に散っていく。
空気女は丸椅子に腰かける。
空気が抜けてしぼんでしまっている。
かたわらで、くたびれている怪力男を足でつついて、

空気女「ふう・・・。ねえ、ふくらましてよ」

怪力男、とりあえず、また休もうとするが、空気女がまた、

空気女「ふくらましてったら」

とつつく。
怪力男、しぶしぶ起き上がって、空気入れのポンプを持って来て押しはじめる。
空気が身体に入っていくと、空気女、恍惚の表情になってくる。
その様子を窺っていた一寸法師、
とび出してきて、怪力男に体当たりする。

一寸法師「この野郎！ また、ひとの女房をふくらましやがって！」

その剣幕に驚いて、逃げてゆく怪力男を見ながら、空気女、無邪気に笑っている。
一寸法師、いまいましげに空気入れを持って、膨らましはじめる。
喘ぎ始める空気女。
空気が溜まると、満足そうに一寸法師は去る。

そこに現れた少年、空気女を脇目に戸板にそっとまわりこむ。
中から、ふくみ笑いのような喘ぐ声がきこえてくる。
少年、立ち止まって、そっと戸板の中を覗いて見ると、
中で蛇遣いの女と怪力男が、全裸で、からみあっている。（声だけ）
少年、ハッとして、

少年「地獄だ！」

と、叫び、蹲る。

男の声「見るために両瞼をふかく裂かむとす 剃刀の刃に地平をうつし」

空気女、少年に声をかける。

空気女「ねえ、ちょっと！」
少年「……」
空気女「いらっしゃい」
少年「おれですか？」
空気女「そうよ」
空気女「坊や、いくつ？」
少年「十五」
空気女「じゃあ、もう一人前じゃないの。いい子だから、あそこにある空気入れを持ってきてち

ょうだい。それで、ここんとこにさして力いっぱい踏んでちょうだい」

少年、素直に空気入れのポンプを持ってきて、それを空気女に接続し、懸命に押すが、押す力が足りないので、ふくらまない。

少年「こうですか？」

空気女「だめねえ、もっと、強く」

少年「ちょっと待ってね、（と上着を脱いで）こう？」

空気女「ちっともよくないわ。だって、ふくらんでこないもの」

少年、汗びっしょりになっている。一休みし、汗を拭く。

少年、ふと空気女の腕にある腕時計に気がつく。

少年「あ、時計だ。それ、オモチャですか？」

空気女「これ？ 本物だよ」

少年「あ、動いている」

空気女「うちの一座じゃ、皆、持ってるよ」

少年「へえ、（感心して）だけど、皆が時計持ってたら、喧嘩になるでしょう」

空気女「どうして？」

少年「だって、だれのを信用すればいいかわからないもの」

空気女、笑う。

少年「一人で一つずつ時計を持っている。それで皆で一緒に旅行している……」

闇。

・8　血産

男の声「とんびの子なけよ下北かねたたき姥捨以前の母眠らしむ　かくれんぼ鬼のままにて老いたれば誰をさがしにくる村祭」

M15・「夕闇と宵闇の間に」

角巻きたちのひそひそ話。（録音）

「きいた？」

「何を？」
「役場の戸籍係が村中の人の戸籍原本を持ったまま、行方不明になったんだって」
「へえっ、いつ？」
「今朝のはなし」
「それで、村中の人の戸籍がなくなってしまって大さわぎ」
「本家から分家へ」
「分家から新家へ」
「自分がだれだかわからなくなってしまった人もあって」
「ともかく皆、大いそぎで自分の家へ帰ったそうです」
「戸籍原本を全部持って行方不明になるなんて」
「ずいぶん、罰あたりなことをしたもんだ」

ひそひそ声が聞こえる中、踊る、魔性の女。

・「ダンス・ソロ　産華」

衣をひるがえして踊っている。
一輪の手に持つ花を噛みちぎってむさぼり食う魔性の女。
SE・からすの鳴き声。
同時に、オギャア！ オギャア！ という産声がきこえてくる。
SE・犬が、暁に向かって吠えている鳴き声。
魔性の女は狂笑する。

闇。

・9　駆け落ち

神社の境内。
少年、足で印をつけて遊んでいる。
やがて足を絡めて転ぶ。
そばに腰をおろし、ほほえむ化鳥。
少年、汽車の音を口真似して、あたりをおどけて歩きまわる。きわめて得意そう。

少年「ポーッ、シュッ、シュッ、ポッポッ、ポッ……、ここから、坂を上るところね、シュシュシュシュシュ……ポーッ。そして、トンネル。ポーッー、ゴトゴトゴトゴトゴト……」
化鳥「うまいのね（笑う）」
少年「ずいぶん、練習したもの。急停車……シューッ！ ズズズズッ！ だけど、おれ、まだ一

度も汽車に乗ったことがないんだ。お姉さん、ある？」
化鳥「あるわ、汽車で来たんだもの」
少年「どっから来たの？」
化鳥「それは秘密よ。……ねえ、新ちゃん」
少年「ン……？」
化鳥「あなた一度、汽車に乗ってみたいと思わない？」
少年「（むっくりと起き上がり）思うよ。どうして？」
化鳥「お姉さんと一緒に、遠くへ行かない？」
少年「（真剣に）だって、お姉さん。それは無理だよ。お姉さんは、本家の嫁じゃないか」
化鳥「いいのよ。あたし、あの家とは水があわないの。だから、夜逃げしようか、と思っていたところだったの。もともと、無理矢理、さらわれてきたようなものだったから」

緊張と興奮で、生つばをのみこむ少年。
境内の遠景。

少年「お姉さんと一緒に汽車に乗るのか？」
化鳥「そうよ。だから、いろいろと力を貸してちょうだい」
少年「勿論、何でもやるよ」
化鳥「（ほほえみを浮かべ）駆け落ちね。（と、キャラメルを頬張る）」

SE・連続した時計の大きな音。
辺りが暗くなり、少年と時計のみの明かりとなる。

少年「・・・駆け落ち〈欠け落ち〉。他郷へ逃げかくれること。江戸時代に欠落ちと書き、いまの法律語の失踪と同意に用いた。逐電。出奔。相思の男女が相ともなってひそかに他郷に逃亡すること（たどたどしく）」

SE・鳴り続けていた柱時計が突然、止まる。
驚いたように、

少年「あ、止まった！」

闇。

・１０　母捨て

少年の家。母親と少年、並んで寝ている。
母親、開けた姿で、寝ている少年の上に顔を近づけて話しかける。

母「新ちゃん」
少年「（寝たふりをして返事しない）」
母「もう、寝たのかい？」
少年「……」
母「おまえ、何か、母ちゃんに不満があるのかい？」
少年「（蒲団をかぶったまま）べつに」
母「そんならいいけど。……最近、態度が変わったような気がするんだよ」
少年「もう寝ようよ。母ちゃん」
母「気にさわることがあったら、何でも言いなさいね。あたしたちは、二人っきりなんだから」
少年「（寝たふり）」
母「母ちゃん、あしたラジオ買ってきてやろうと思うんだよ。四球スーパーのいいのがあったから」
少年「……」
母「おまえの欲しかったのだろ？」

ＳＥ・ひとつ柱時計が鳴る。
蒲団をかぶって、じっと待っている少年。
そっと頭をあげてふりかえる。
もう、母親は眠ったらしい。大股をひらき、いびきをかいている。
聞こえる少女の歌声。

Ｍ１６・「少年探偵団のテーマ」

そっと蒲団を抜け出し、帽子をかぶり、
母に向かって「バイバイ」と小声で言って出てゆく少年。

闇。

・11・門出

化鳥が荷物を持ち、心細そうに立って少年を待っている。
そこにやってくる少年。

少年「待った？」
化鳥　「・・・。」
少年「行こう」

両手に荷物を持った少年と化鳥、歩き出す。

M17・「冬風」

音楽が聞こえ、明かりが日の出を様する。

……と、突然、客席後方から手を叩く音が聞こえ、

演出家「はい、ここで止めます。お疲れ様です！」

と、演出家が声を出す。演劇の稽古だったのが判明する。
少年と化鳥を演じていた俳優は素に戻る。
他の演者も顔を出し、
「お疲れ様です」
と、言い合っている。

・12　現実原則

絵空箱。
小さな空間で、
客席からそれを見ていた中年の私と演出家、舞台監督、そして制作がいる。
空間全体に地明かりがともる。

私「今日はここまで？」
演出家「はい。後半はまだ振付も構成も出来てないんすよ。つーか、寺さんが、あんな辺ぴな村で育ったとは知りませんでしたよ」
私「いや、大分、実際とは違ってるんです。誇張してありますから」
制作「どうもありがとうございました。（あきらかにお世辞で）面白かったです」

私「もう帰るの？なんか、感想とかあれば。」
制作「そうですね・・・」

舞台監督が声を出して、

舞台監督「寺さん、にしても、暗転、多すぎじゃないですか？」
私「その話は、あとにしてくれ」

暫しの間が続く。

私は缶コーヒーをプシュリと開けて、

私「・・・ぼくは、いろんな意味で行き詰まっていましてね、自分の子供時代を扱って書いてきたつもりの詩が、実際には子供時代を売りに出した、という感じになってしまった。風土でもそうなんだけど、書くと書いた分だけ失うことになる。書くつもりで対象化したとたんに、自分も、風景も、みんな厚化粧した見世物になってしまうんだな」
制作「でも、そうすることによって、自分の子供時代や風土から自由になるってこともあるんじゃないですか？」
私「……」
制作「まあ、大体、過ぎ去ったことは全部、虚構だと思えばいいんですよ」
私「しかし、書かずにしまっておけば、それは自分の核になったかも知れなかった。きみは、原体験が現在を支えている、と考えることはありませんか」
制作「ないですね。（笑う）それは、むしろ首輪みたいなもんじゃないんですかね？」
私「……」
演出家「人間は、記憶から解放されない限り、ほんとに自由になることなんかできないんですよ、たぶん」

私、缶コーヒーを飲み切る。

舞台監督「ボルヘスが言ってるじゃないですか。五日前に失くした銀貨と、今日見つけたその銀貨とは、同じものじゃないって。ましてや、その銀貨がおとといも、きのうも存在しつづけていたと考えることなんて、どうしてできるもんですかね」
私「ぼくは長いあいだ、夢ということを考えていたんです。たとえば、夜、寝て見る夢の中の自分にとっては現実だった。夢の中での労働は、夢の中の自分にとっては現実だった、とね。だから、ほんとに夢を守ろうとしたら、できるだけ眠らないでいないといけないかもしれない……」
演出家「でも寺さん、夢を計画的に見たり、記憶を自在に編集できたりするようじゃないと、ほんものの作家とは言えないんじゃないですか？ そうそう、寺さんに一つ面白い問題。もし、寺さんがタイム・マシーンに乗って数百年をさかのぼり、寺さんの三代前のおばあさんを殺したとしたら、現在の寺さんはいなくなるか？・・・なんて」

溶暗。

私「もし、私がタイム・マシーンに乗って数百年をさかのぼり、私の三代前のおばあさんを殺したとしたら、現在の私はいなくなるか・・・？」

私は客席から誰もいない舞台に上がってくる。

私「私は、答えをさがしていた。三代前の祖母を殺すのは、現在の私である。だが、その祖母が殺された場合には、当然のことだが、二代前の祖母も母も、そして私も存在しなかったということになる。では、だれが……」

私「私は、私の作りかけの作品の、明日渡す分の台本を整理しなければならなかった。ほんの小さな舞台に上がってみると、思いがけない男に出会った。それは、二十年前の私自身だった」

戸板の影から少し傾いて二十年前の私・少年が顔を出す。
私を見て、少してれくさそうな笑顔を向ける。
だれもいない舞台。
日が縞模様にさしこんでいる。
ＳＥ・一羽のからすの鳴き声。

私「少年時代の私と出会って、私は無性に腹立たしくなるのを感じた。田園の風景は、あんなに小ぎれいなものではなかった。おふくろは子供の私を座敷牢に閉じこめようとしていたし、隣の人妻だって、私の考えていたような「憧れの人」などではなかったのだ」

ドアがギイーッと開く音がし、
ＳＥ・激しい風の音。
ＳＥ・重なるカラスの鳴き声。

私「私の少年時代は、私の嘘だったのだ」

急激な闇。

なだれ込む音楽。
激しい明かりが灯ると、
ストロボの中、嗚咽するようにはげしく、辻楽士の青年が唄っている。

M18・「夜鳥」

夜のからすが鳴くときは　夜にかならず人が死ぬ
今日もどこかの　六十爺が　生娘抱いて腹上死
赤くひらいた口の中　ヤニで汚れた金歯が光る
投げ捨てられた　ステテコにゃ　娘がとばした　揚羽蝶　（詞　三上寛）

ストロボの中、唄の最中に浮かび上がる心象風景。
やがて血のような真っ赤なストロボに変わり、

セーラー服を着た女（関口）が、ボロを着た男（中島）に犯されている。

「ムーブ・デュオ　過去の被虐」

唄が終わると、

私「父なし子が、村の人たちに祝福されるわけなんかなかったのだ」

私にスポットの光が落ちる。

・13　間引き

そこに、生まれたばかりの赤児を抱いてあやしている草衣が現れる。
いつのまにか、脇には歌姫の少女がぽつねんと座っている。
草衣は嬉しそうに、優しく舞っている。その傍らには安産の腹巻の犬。

M19・「孕み唄」

切り口の鋭い夜につかまって、硬い夜のそこにある柔らかい土の上、
何代ものニンゲンサマの血を吸って、生臭く暗んだ土を布団に、
犯されて、私たち、孕んだ。あなたの息に肉を溶かされ、
月のかがり火に身を焼いて、ゆっくりと体が湿った。
音やものや香りや味で、時間を超えて、
私たち、子を産む。

「ダンス・ソロ　育てや憂いや」

やがて再び、角巻たちのひそひそ声が空間に響く。（録音）

角巻「この赤ん坊、アザがある。こりゃ、大変だよ。たたりだよ」
角巻「犬でも憑いたんだべ」
角巻「アザだ！アザだ！」
角巻「したら、また村中が凶作になるべ」
角巻「たたりもっけだ。おまえの因果だ！」
角巻「踏みつぶしか、川流しか、ともかく間引きしないと、ひどいことになるよ！」
角巻「犬神が憑いたんだ！」

喜びが一瞬、恐怖に変わって、草衣は世間から逃げるように舞う。
必死に赤児を抱いて逃げるように去る。

私だけが光の中に残る。

私「私は、家出についても、私はきれいごとで語りすぎたようだ」

・14　家出の真

いつのまにか、後ろには、少年と母親がいる。

じっとしている少年、そっと頭をあげてふりかえる。
母親は眠ったらしい。
少年、そっと立ち上がっり、帽子をかぶる。
「バイバイ」と小声で言う。
外へ出ようとすると、ムクッと起き上がった母親が、

母「どこへゆくの？」
少年「（ドキッとして）小便だよ」
母「そんな支度してかい？（立ち上がり）わかっているよ。おまえ、どっか遠くへ行く気なんだろ？」

少年、とび出そうとする。
母親、すごい勢いで駆けてきて、立ちふさがる。

母「行かないで、新ちゃん！母ちゃんを一人にしないで！」
少年「邪魔しないでくれ、おれはもう決めたんだ！」

母「何でもあげるよ。野球の道具も買ってやるよ」
少年「(凶暴に) 行かせてくれったら!」
母「いんや、だめだ。どうしても行くんなら、母ちゃんを殺してから行け!」

少年、その母親と揉みあう。
母親、前がはだけるが、かまわず少年にすがりつく。
少年、母親を押し返そうとして髪をつかむ。
二、三本の髪の毛が抜け、母親、倒れる。少年、そのすきにとび出す。

母「(がっかりしたように) とうとう、行ってしまった」

私だけが光の中に残る。

・15　母の残思

そこに、走ってくる少年。
ただし、そこには化鳥はいない。

少年「姉さん?・・・姉さん?・・・姉さん!」

少年の呆然とした顔。
SE・鶏の声。
ぽつねんと立つ少年。
恐山に昇る日が見える。
少年、手をひらく。手にからみついている母親の二、三本の髪の毛。
それを指にまきつける。

私「私は手にからみついた母の髪の毛を指にぐるぐるとまきつけた」

やがて、
SE・列車の発車する音。
私だけが光の中に残る。

・16　黒松心中

後ろには、化鳥と見知らぬ男（嵐）が抱き合っている。
少年、振り返り、

少年「（驚いて）あ、お姉さん！（ふりむく化鳥）どうしてこんなところに！汽車はもう出てしまうよ」
化鳥「（ほほえんで）今なら、まだ間に合うわ。ひとりでお乗りなさい」
少年「だって、それじゃ約束が！」
化鳥「約束？」
少年「お姉さん、一緒に駆け落ちしようと言ったじゃないか」
化鳥「（笑い出す）まあ……」

男、一見ヤクザ風で、あぐらをかき、壁に凭れかかっている。
腕に血のにじんだ包帯を巻いている。少年、敵意をもって男をにらみつける。
が、男は相手にするふうもない。

少年「お姉さんはおれをだましたな。……この人はだれです」
化鳥「この人は、あたしのいい人よ。この世でいちばん大切な人」
少年「じゃ、おれは……？」
化鳥「あなたはまだ子供でしょ。大きくなると、いろんなことがわかるわ」
男「おい坊主、中へ入れ！」
少年「（ささやかに抵抗して）いやだ」
男「いいから、いらっしゃい。オムスビやるぞ」
少年「（首をふる）」
男「（ふいに、きびしく怒鳴る）そんなところで突っ立ってると、人目につくじゃないか！こっちへおいで、ぐずぐずしないで」

少年、おずおずと近づき、男と一緒にオムスビを食べ始める。
化鳥、だれに言うとなく語っている。

M20・「血の婚礼」

SE・人のガヤ、鉄を叩く音、戦火の響き、銃声、悲鳴、少女の泣き声、糸車の音、喘ぎ声、カラスの鳴き声、笑い声。炎の爆ぜる音。

化鳥「とても長い戦争だったわ。私の家は田圃二反の水呑み百姓だったの」
化鳥「でも、父さんが出征したあとは、だれも田を耕す人がいなくなってしまった。母さんが、心臓発作を起こして倒れて、田は荒れ放題になり、草はぼうぼうと生えていた。米びつの中は

いつも空っぽだった。食べる物がなくて、盗みもしたわ。その頃、田を売らないか、という話があった」

化鳥「母さんは嫌だと言った。黒い鞄を持った借金取りが、毎日やってきて、田を売ることをすすめたんだけど、母さんは半狂乱になって、父さんに申し訳がない、父さんが帰ってくるまでは、田を手放すことなんかできないと言っていた。だけど、その母さんも、まもなく死んだわ。そして、田は人手に渡ることが決まり、わたしは他の町の親戚に引きとられることになった。わたしは、真夜中にそっと起き出して、売られてしまった夜の冬田に死んだ母さんの真っ赤な櫛を埋めた」

化鳥「夜になると、埋めた真っ赤な櫛が唄をうたった。畑をかえせ、田をかえせ、櫛にからんだ黒髪の十五の年のお祭りの、お面をかえせ、笛かえせ、かなしいわたしの顔かえせ」

化鳥「間もなく戦争が終ったわ。だけど苦しみが終ったわけではなかった。私は焼け跡の巡礼女、うしろ指の夜逃げ女、泥まみれの淫売なのです。「母さん、どうか生きかえって、もう一度あたしを妊娠してください。あたしはもうやり直しができないのです」。」

化鳥「夢の中で、あたしは何度も田舎へ帰ってきたわ。そして帰ってくるたび、田を掘り起こした。すると、どこを掘っても真っ赤な櫛が出てきた。村中の田という田から、死んだ母さんの真っ赤な櫛、恨みの真っ赤な櫛。血で染めた真っ赤な櫛が百も二百もぞくぞくと出てきた。そしてどの櫛も口を揃えてあたしに言った。「女なんかに生まれるんじゃなかった」、「人の母にはなるんじゃなかった」。」

私は暗がりの中、ぽつりと言う。

私「どこから、つなぎあわせてよいのかわからなくなってしまった。私は、二十年前のわが家の近くまで戻ってきてしまったのだ」

化鳥「この人とめぐりあったときは、やっと抜け出せた、と思ったの。何だか知らないけど、うまくやっていけそうな気がしたの。でも、いいことは長くつづかなかった」

化鳥「この人は共産党だったから追われていたのね。ある晩、二、三人の男の人たちがやってきて、この人を連れて出ていった。それっきり、帰ってこなかった」

少年と男は、かがみこみ、かなり打ちとけあったように見える。
男は煙草を出して口にくわえ、少年にも一本すすめる。
少年、首をふる。
マッチ、擦られる。

化鳥「一年たって、すすめる人があって、この村の地主のとこへ嫁に来たわ。自分からすすんで、

座敷牢に入りに来たようなもんだったけど」

男「もういいじゃないか、そんな話。こうして会えたんだから」

SE・火の爆ぜる音。

化鳥「(気をとり直して)それもそうね。(間)こうして、会えたのね」

少年「これから、どうするんですか?」

男「旅に出るんだ。……どうだ、おまえも一緒に行くか?」

少年「おれも?」

男「二人だって、三人だって大して変わりゃしないんだ、なあ」

少年「でも、どこへ?」

男「(ちょっと、つまる)いいとこ」

SE・からすの声。

化鳥「日あたりのいい空き家が一軒あるの。庭には紫陽花が咲いてて、ピアノの音がきこえているの。子供部屋もあるし、ひろいお風呂もついているわ。もう、だれにも邪魔されることはないんだわ」

男、ポケットから、もみくちゃの札をとり出し、ひろげる。

男「おい坊主。悪いけどな、これで酒を一本買ってきてくれ」

少年「酒を?」

男「そうだ。乾杯だ。乾杯するんだ。(肩を叩いて)門出だぞ、おまえにもいいところを見せてやる」

少年、いささか心を残しながら、立ち上がる。

男、「駆け足」と声をかける。

少年と暗がりの私、目が合う。

私「どこへ行くんだ?」

少年「酒を買いに」

私「おれも、一緒に行ってやろう」

少年と私は歩き出す。

化鳥は静かに笑いながら舞い始める。

「ダンス・ソロ　散り人と」

と、同時に、
闇。
闇の中で、私の声。

私　「（声）私は二十年前の私と一緒に見とどけたいと思った。過去の作りかえには、二人の合意が必要なのだ」

明かりが灯ると、
無惨に心中している化鳥と男の二人。
細紐で足と腰と首をきっちり縛って、抱きあうようにして死んでいる。
呆然とする少年と、私。
化鳥の美しい死顔。

なだれ込む「般若心経」の音楽と闇！

・１７　般若と識

激しく聞こえる男女の念仏。
黒づくめの角巻たちがマッチを擦りながら飛び交う。
逃げ回る赤ん坊を抱いた草衣。
角巻たちは草衣を追い詰めていく。

「ダンス　群舞・般若心経」

Ｍ２１・『般若心経』

魔訶般若波羅蜜多心経　（まかはんにゃーはーらーみたしんぎょう）
観自在菩薩　（かんじーざいぼーさーつー）
行深般若波羅蜜多時　（ぎょうじんはんにゃーはーらーみたじー）
照見五蘊皆空　（しょうけんごーうんかいくう）
度一切苦厄　（どーいっさいくーやく）
舎利子　（しゃーりーしー）
色不異空　（しきふーいーくう）
空不異色　（くうふーいーしき）
色即是空　（しきそくぜーくう）
空即是色　（くうそくぜーしき）

受想行識　（じゅーそうぎょうしき）
亦復如是　（やくぷーにょーぜー）
舎利子　（しゃーりーしー）
是諸法空相　（ぜーしょーほうくうそう）
不生不滅　（ふーしょうふーめつ）
不垢不浄　（ふーくーふーじょう）
不増不減　（ふーぞうふーげん）
是故空中無色　（ぜーこーくうちゅうむーしき）
無受想行識　（むーじゅーそうぎょうしき）
無眼耳鼻舌身意　（むーげんにーびーぜっしんにー）
無色声香味触法　（むーしきしょうこうみーそくほう）
無眼界乃至無意識界　（むーげんかいないしーむーいーしきかい）
無無明　（むーむーみょう）
亦無無明尽　（やくむーむーみょうじん）
乃至無老死　（ないしーむーろうしー）
亦無老死尽　（やくむーろうしーじん）
無苦集滅道　（むーくーしゅうめつどう）
無智亦無得　（むーちーやくむーとく）
以無所得故　（いーむーしょーとくこー）
菩提薩垂　（ぼーだいさったー）
依般若波羅蜜多故　（えーはんにゃーはーらーみーたーこー）
心無罣礙　（しんむーけーげー）
無罣礙故　（むーけーげーこー）
無有恐怖　（むーうーくーふー）
遠離一切顛倒夢想　（おんりーいっさいてんどうーむーそう）
究竟涅槃　（くーきょうねーはん）
三世諸仏　（さんぜーしょーぶつ）
依般若波羅蜜多故　（えーはんにゃーはーらーみーたーこー）
得阿耨多羅三藐三菩提　（とくあーのくたーらーさんみゃくさんぼーだい）
故知般若波羅蜜多　（こーちーはんにゃーはーらーみーたー）
是大神呪　（ぜーだいしんしゅー）
是大明呪　（ぜーだいみょうしゅー）
是無上呪　（ぜーむーじょうしゅー）
是無等等呪　（ぜーむーとうどうしゅー）
能除一切苦　（のうじょういっさいくー）
真実不虚　（しんじつふーこー）
故説般若波羅蜜多呪　（こーせつはんにゃーはーらーみーたーしゅー）
即説呪曰　（そくせつしゅーわー）
掲諦掲諦　（ぎゃーてーぎゃーてー）
波羅掲諦　（はらぎゃーてー）

波羅僧掲諦　（はらそーぎゃーてー）
菩提薩婆訶　（ぼじそわかー）
般若心経　（はんにゃしんぎょう）

追い詰められた草衣、
思いつめ、泣きながら赤ん坊を抱きしめ、高く上げ、川に投げ込む。
瞬間、
闇。
ＳＥ・激しい川音と泡の音。

・１８　惜春鳥

音楽が聞こえる。
明かりが灯ると、辻楽士の青年と、歌姫の少女が唄っている。

草衣、居なくなった赤ん坊を探し、彷徨うように、揺蕩いながら、通り過ぎる。
かすかな、赤ん坊の泣き声。

Ｍ２２・「惜春鳥」

〜姉が血を吐く　妹が火吐く　謎の暗闇　瓶を吐く
瓶の中味の　三日月青く　指でさわれば　身も細る
ひとり地獄を　さまようあなた　戸籍謄本ぬすまれて
血よりも赤き　花ふりながら　人のうらみを　めじるしに
影を失くした　天文学は　まっくらくらの　家なき子
銀の羊と　うぐいす連れて　あたしゃ死ぬまで　あとつける

三度、ひそひそ声が聞こえる。

角巻き「間引きしたそうだ」
角巻き「アザのある、たたりの赤ん坊を」
角巻き「踏みつぶしたか、川流ししたか」
角巻き「あるいは畑を掘って埋めたか」
角巻き「ともかく間引きしたそうだ」
角巻き「これでひとまず災難のがれ」
角巻き「ところで親のほうは」
角巻き「行方不明だ」

角巻き「犬を殺され、赤ん坊を間引きしたあとで」
角巻き「見かけたものはだれもいない」
角巻き「たたりもっけの子殺しの」
角巻き「あの娘は行方不明だそうだ」

歌姫の女の子は去って行く。

・19　サーカスの秘事

歌姫の女の子を追うように、歩いてくる、少年と私。

私「あのサーカスにくっついて、遠い町まで行くことだってできたんだ」
少年「だけど、おれは一度も、サーカスを見たことがなかったもの。看板だけしか知らないんだよ」
私「いや、俺は見た。ほんとは、天幕の中味の正体を、すっかり見てしまっていたのだ」

サーカスのジンタが聞こえる。

M23・「G線上のカーニバル・イントロ」

私「わたしにとって、サーカスとは一体なんだったのだろう」

私「それは、はじめて買った腕時計の蓋をあけたときの驚きに似ていた。いくつかの歯車の噛み合う音のカーニバル。六十進法の魔術師たちがしかけるトリックの数々。だが蓋をしめると、道化師たちは皆、姿を消してしまう」

男の声「亡き父の位牌の裏のわが指紋さみしくほぐれゆく夜ならむ　吸ひさしの煙草で北を指すときの北暗ければ望郷ならず」

私　「うるさい、うるさい！（上を見上げ男の声に対して）」

鳥打ち帽、せむし娘、踊り子、空気女、蛇遣いの女、一寸法師、怪力男、辻楽士の青年、歌姫の少女、踊りながら現れる。
SE・ドッと喝采がわき起こる。
ジンタが変調し響き渡り、開演の気配。

M23「G線上のカーニバル・サビ」

一寸法師が踊り子の女と体を寄せ合い踊り、
空気女を小突く、
その回りを、怪力男、鳥打帽、せむし娘は、鳥打帽、馬鹿にするように踊っている。
蛇遣いの女は腹を抱えてゲラゲラと笑っている。
一寸法師と踊り子が去ると、
鳥打帽、なにやら怒ったように、空気女の首を絞める。
やがて、空気女が動かなくなる。
と、同時に静寂。
空気女を覗き込む、蛇遣いの女、せむし娘、怪力男、鳥打帽、そして私。

「ダンス・群舞　幕間舞踊」

ややあって薄目をあく空気女。
起き上がって泣き笑いの表情。

空気女「大丈夫だよ。あたしは、死んだりしないよ」

一同、けたたましく哄笑する。
と同時にまたジンタが響き渡る。
けたたましく笑い踊りながら一列になって去って行くサーカス団。
少年もその後についていってしまう。

一人だけ狐につままれたように、呆然としている私。

SE・いきなり大きな音で、ボーン、ボーン、と、柱時計の音が響く。
男の声、

男の声「売りにゆく柱時計がふいに鳴る横抱きにして枯野ゆくとき」

私　「黙れ！（男の声に対して）」

響く、母親の声。

母親「（声）新ちゃーん！」

ハッと振り返る、私。

闇が攫う。

・２０　少年と私

Ｍ２４・「百面家族（※相談）」

田圃の中の座敷。
小さな絵空箱の中の一畳の畳の上、
その畳の上に、私と二十年前の私である少年とが向き合って将棋をさしている。
後ろの幕とシャッターが上がり、会場内と外界（ドアの向こう側）が現れる。
前景（絵空箱内）と後景（絵空箱外）で並行して劇は演じられていく。
外界では青年（牛）が敬礼している。
日の丸の旗を掲げた兄弟たちに見送られてゆく。

「ダンス・外界舞踊（※稽古場で創作）」

私「おまえの番だ」
少年「わかってるよ」

少年、将棋盤をにらんで考えこんでいる。

少年「どうすすめたらいいか、わからなくなってしまった」
私「王が動けばいいんだよ」
少年「角道だもの」
私「左だよ。そっちは右だ。おまえの右がおれの左になってるんだ」
少年「あっ、これだな」

少年、一駒、動かす。

少年「おれは、大きくなったら商船学校へ入ろうと思ってるんだ」
私「もう手遅れだよ。おれは文科系の大学へ入ってしまったんだ」

青年（牛）、若い女を連れてやってきて通り過ぎる。
その後ろを付いていく、死神たち。

少年「でも、もしかしたら、やり直しがきくかもしれない」
私「無理さ。きみの番だ」

一駒、また動かす少年。
私の腕にはめられた腕時計に気がつく。

少年「あっ、買ったね」

私「五年前に買った」
少年「五年後か」
私「そうはならないさ。おれたちは二十、年が違うんだ」
私「そういえば、中二の夏休みに万引きしたツルゲーネフの小説はどこへかくしておいたっけ？」
少年「無理だよ。まだおれは中一だもの」
私「そうだったな」

白い衣裳を着た花嫁と嫁入りの一行が踊りながら通る。

少年「でも来年になったって、おれは万引きなんかしない」
私「（冷笑する）おれはおまえのことは何でも知っているが、おまえはおれのことを何一つ知らないんだよ」
少年「勿体つけずに教えてくれよ。おれはいつ汽車に乗るの。おれはいつ、女と寝るの？」
私「（首をふる）ほら、桂馬が死んでるよ」
少年「あっ、ちょっと待って」
私「待てないね、待っていたら、おまえに追いつかれてしまう。時間は〈待った〉がきかないんだ」

青年（牛）が、やがてズボンをずりあげながら出てくる。女、スカートをはきながら出てくる。横から色っぽい格好の三人の女があらわれる。

私「子供の頃、蛍をつかまえてきた。母ちゃんに見せようと思って裏口からまわりこんでみたら、何だか変な声がした。戸のすきまから覗くと、母ちゃんが見たことのない男に抱かれていた。赤い蹴出しと毛脛が見えた。おれは吐き気がした。折角つかまえた蛍を見せるのをやめて、机の引き出しにかくしておいた。その晩、遅くなってから、わが家に火事があり、近所の家まで焼けてしまった。警察では漏電だと言ったが、嘘だった。ほんとはおれが机の引き出しにかくしておいた一匹の蛍の火が原因だったのだ」

ちんどん屋が演奏し踊りながら通りすぎる。

少年「嘘だよ」
私「どうしてわかる」
少年「家には火事なんか一度もなかった」
私「（笑う）」
少年「嘘だろ？」
私「作り直しのきかない過去なんてどこにもないんだよ」

青年（牛）、いきなりドアを開け、中に入ってきて、観客に語りかける。

牛「青森県の地図を見たことあるだろう。下北半島ってのがふりあげたマサカリの形で、津軽は

人間の頭なんだ。一撃くらわせられる前の一瞬、おれはその脳天のどまん中で生まれた。おれは三回家出して三回つかまった。おれのかわいがっていた伝書鳩は北国の曇った空にぶつかって、くだけてしまった。ああ、おれは兵隊になるのも親父になるのもやめて歌手になった。キャベジン飲んでハワイに行くのだ。ハワイへ行ってきて、小泊村の英雄になるのだ。小泊村の不幸な子供たちのためのチャリティー・ワンマンショーをひらいて、村長から表彰される三上寛になるのだ。偉大になるまで唄うのだ。唄って新聞に出るのだ。いつものように幕があき、もう、オマンコ（SE・ピーが入る）なのだ。なのだ、なのだもあきたのだ。たかが人生、だましても、ぶったくっても、けとばしても、あしたになれば花一輪。（観客に向かって指さして怒鳴る）あんたら、いろんな格好して並んで批評していたって、あしたになれば、みんなくたばってしまうんだよ！」

ドアが開いて数人が入ってきて、小言を言いながら、青年（牛）をまた外界へと引きずり出していく。

少年「母ちゃんは、どうしてるの？」
私「相変わらずだよ。叱言ばかり言っている」
少年「同じとこに住んでいるんだね」
私「そう。家出するとき、ついて来てしまったんだ」
少年「いやだよ。そんなのは……」
私「だが、そうなってしまったんだ」

葬列が踊りながら通る。青年（牛）の嫁と子供、そして母親が泣いている。

少年「（笑う）でも、おれはそうしないよ。ひとりで逃げてやる」
私「どこまでだって追っかけてくるさ、ほら、王手だよ」
少年「あんたは、二十歳を過ぎてから腕時計を買った。でも、おれは明日買うことだってできる。そうすれば、おれはあんたじゃなくなる」
私「こまかい記憶ちがいってのはよくあるもんだよ」
少年「……」
私「おれの失くしたものをおまえが見つけることはできるだろう。それは成長ってもんだ。だけど、おまえの失くしたものをおれが見つけるってことはできない。時間が経ちすぎている。もう手遅れだ」

その後ろを火売りの少女たちが通ってゆく。

少年「ほんとうはおれ、母ちゃんを捨てようと思ったことがあるんだ」
私「思ったさ。おれだって、何べんも思った」

大衆割烹すみれ、を覗いていた二人、振り返ると踊り出す。

私「殺そうと思ったことだってある」

少年「(異様な目の輝き)ほんと、いつ頃?」
私「今だってそうだ。毎日思っている」
少年「(身を乗り出し)殺すのか、すごいなあ!」
私「でも、おれが今の母ちゃんを殺すなんて、とてもできない。二十年前の母ちゃんなら殺すことができると思う」
少年「母ちゃんが死んでしまったら、何もかも変わってしまうよ。あんたもいなくなってしまうかもしれない」
私「それを試したいのだ。二十年前の母ちゃんを殺したら、今のおれまで本当に居なくなってしまうのか」
私「そしておまえにも見せてやりたい。もし母ちゃんがいなかったら、おまえはおれではない、ほかの男になるのだということを。一人の男がはじめて汽車に乗るためには、その男の母親の死体が必要なのだということを」
私「さあおまえ、これから家へ戻って縄と草刈り鎌を取ってくるんだ」
少年「そんなもの、どうするの?」
私「いいから取ってくるんだ」
少年「ほんとうに殺るの?」
少年「(声)だけどおれ、母ちゃんを愛しているよ」
私「(声)だから殺らなくちゃいけないのだ。ぐずぐずするな、おれの言うとおりにするんだ」
少年「(声)縄で縛って、草刈り鎌で突くんだね」
私「そうだ。おれはこの目で見たいのだ。実際に起こらなかったことも記憶のうちだということを」

幕とシャッターが閉まり、闇。

・21　裏切り

SE・はげしく吹く風の音。
恐山。
少年、ややなさけない声で汽車の口真似、シュポ、シュポ、シュポ、シュポとぐるぐる回っている。
途中で、汗を拭き、また回る。
その腕に、二十年後の私がしている腕時計が光っている。
戸板の陰に、風に吹かれて立っているひとりの女。
少年、その女に気がつき、ハッと立ちすくむ。
女、にっこりとほほえみかける。
少年「あ、あんたは!」
草衣「・・・(ニコリと笑う)」

女は、子供を間引きして村から出奔した草衣である。
出奔前とは見ちがえるように服装も化粧もモダンになっている。
少年が通り過ぎようとすると、その前に立ちふさがってくるので、
少年、やむを得ず話しかける。

少年「ぜんぜんわかんなかったよ」
草衣「・・・(ニコニコしている)」
少年「いつか、間引きしたってきいたよ」
草衣「・・・(ニコニコしている)」
少年「それから行方不明になったんだって?」
草衣「・・・(答えない)」
少年「おれ、ちょっと用があるから……、(と、行こうとする)」
草衣「・・・(さえぎる)」

さりげなく洋服を脱ぎ始める草衣、いきなり少年にせまる。
少年びっくりして、逃げる。
怒濤のように押し寄せてくる音楽、血湖の色。
草衣が狂ったように踊りながら少年におそいかかり、ズボンを脱がせる。

「ダンス・ソロ　姦通」

M25「和讃」

これはこの世のことならず
死出の山路のすそ野なる賽の河原の物語
あああ……
手足は血しおに染みながら 河原の石をとり集め
これにて回向の塔を積む 一つつんでは父のため
二つつんでは母のため 三つつんでは国のため
四つつんでは誰のため あああ ややや
兄弟わが身と回向して 昼はひとりで遊べども
日も入りあいのその頃に 地獄の鬼があらわれて
積みたる塔をおしくずす
あああ

急速に高まる音楽、
SE・からすの鳴き声や、人々の絶叫する声がひびきあう。
号泣する少年を、草衣、鬼のように組みふせて、むさぼるように髪を乱して犯しきる。

闇。
スポットが落ちる。中には私。

私「待ちくたびれた私は我に返った。二十年前の私は、現在の私を裏切ってどこかへ行ってしまったのだ。私は自分で母を殺さなければならなかった。縄と草刈り鎌とそして一抹の不安と……」

・22　劇の死

少年の家。
SE・柱時計が鳴っている。
いつのまにか後ろでは、二十年前の母親が仏壇を磨いている。
縄と草刈り鎌をかまえた私。

私「母は私の吐くつばだ。つばの中でも、いちばん薄いつばだ！」

私は「母ちゃん」と呼びかける。
母親、ふりむく。私、手に草刈り鎌を持っている。

母「(まるでいつものように) 新ちゃん、遅かったじゃないか。どこ行ってたの？そと寒かったろう。足ふいたか？腹すいたか？」
私「(何か言いかけて口ごもる)」
母「いますぐに御飯にするからな」

時が過ぎてゆく。
畳の上で、私と母親、向き合って二十年前と同じようにちゃぶ台で、御飯を食べている。
私と目が合うと、母親、満足そうに、にっと笑う。

私「どこからでもやり直しはできるだろう。母だけではなく、私さえも、私自身がつくり出した一片の物語の主人公にすぎないのだから。そしてこれは、たかが演劇なのだから。だが、たかが演劇の中でさえ、たった一人の母も殺せない私自身とは、いったいだれなのだ？ ここは、令和五年六月〇〇日。東京都新宿区山吹町誠志堂ビル一階！」

と、畳の上で二人が食事していた後ろの幕とシャッターが開き、
メイク、衣装を脱いだ、全ての俳優、ダンサー、音楽家たちが現れる。

流れ込む歌声。(外界と口パク)

M26・「産声」

あ、あ、あああ。
あ、あ、あああ。
あ、あ、あー。

母　おいしい？
私　うまいよ
母　おいしい？
私　うまいよ
母　おいしい？
私　うまいよ

母親と私と柱時計、それと御飯を食べている膳を残して、
二人はまるで二十年前のある日と同じように晩御飯を食べている。
うしろのガラス戸の向こうには、役を脱いだ「天井桟敷の人々」
ある者は手をふり、ある者はうつむきながら、あるものは歌いながら、そしてある者は踊りながら、会場内を見ている。

私、いきなりちゃぶ台をひっくり返す。

私　俺は寺門祐介って名前だ、「寺さん」と呼びたいってためにこの役に指定された…安易だ。さっきから、上海異人娼館でも、この田園に死すでも、下手くそに声や詩を朗読していたのが演出家だ。いちいち煩いったりゃありゃしない。あんたの出番はこの劇には存在しちゃいけないんだ。劇が始まってしまえば、演出家の実験だろうが、作家の言葉だろうが、実際に真実を演じているのは、俺たちだ。これは、俺たち自身なんだ、俺たちの物語だ。
そして劇は終わった、だからここからは、あんたたちの物語になるんだ！（観客に向かって）
劇は死んだ！死んだんだ！死んだからには、俺も、みんなも、あんたたちも自由なんだ！
さよなら、天井桟敷の人々！
蜂谷さん！ビールちょうだい！

M27　・「船出　エピローグ」

音楽が変調し、全ての出演者たちが会場になだれ込む。
観客に親し気に話しかける出演者たち。
そのまま、場は、お客様出し、面会へと、突入していく・・・。